

「原子力って結局『おどは野となれ山となれ』ですよ」。そう話すのは、鳥取市で環境問題に取り組む市民運動家の土井淑平さん(70)。

2011.7.3 朝日新聞

鳥取県と岡山県の県境にある人形峠。その周辺で、ウラン鉱がみづかり56年から採掘が始まった。ただ品位が低くて採算に合わず60年代半ばにはほぼ終了。だが、周辺に放置されていた大量の残土が放射性を帯びていることが88年になって発覚する。

残土は小さな丘をなし、すでに雑木や雑草に覆われていた。ほんとうに、野となり山となっていた。一つの地区で土井さんも関わった住民たちの撤去要求運動が始まる。しかし、当時の動燃(現在の日本原子力研究開発機構)や県や町との度重なる交渉と訴訟の末になんとか撤去が完了するのはさらに18年後である。

忘れる、ほったらかす、行方不明になる、解決にもたつく。フランスでも日本でも放射能の管理については、1万年どころか、たった数十年でこの有り様だ。

土井さんは運動の経験から「放射能のゴミを管理し続けられるなんて話は、空想科学小説」という。技術面もさることながら、それを抱え込む社会が問題だ。たとえ数百年でも政変はあるだろうし、戦争だって起きるかもしれない。今ある企業はほとんどが消えているだろう。「いったい誰が責任を取るのでしょうか。残土でさえこれだけ混乱した。福島原発のがれきの始末や廃炉はどれほど大変か」

爾々と進む放射能の時間と迷走や暴走を繰り返す人間の時間。二つの時間に折り合いをつけるのはもっと難しくなりそうだ。

2009年、米原子力規制委員会(NRC)はネバダ州に計画されている高レベル放射性廃棄物最終処分場について、1万年ではなく100万年後の放射線レベルまで考慮する方針を示した。100万年前といえば、原人ヒトカントロプスの時代だ。

放射能を管理するために当てることのできるものがあるとするれば、それは科学や社会の進歩よりも、ヒトが落ち着いた社会を築ける生物に進化することかもしれない。